

中国近世
における
短篇白話小説の研究

小野 四 平 著

中国近世における

短篇白話小説の研究

小野四平著

評論社

中国近世
における 短篇白話小説の研究

昭和53年12月20日 初版発行

¥ 4,900

著 者 小 野 四 平

発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 三 倉 印 刷
製本所 株式会社 小林製本

発 行 所 株式 評 論 社
会社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町2-16

電話代表 (265) 1961

振替東京 8-7294

(検印省略)

落丁・乱丁本は本社にてお取りかえいたします。

(A-1)

目次

- 序章 短篇白話小説の成立 五
- 第一章 馮夢龍について 三
- 第二章 短篇白話小説における裁判 四
- 第三章 短篇白話小説における恋愛 五
- 第四章 仏教説話の研究 一三
- (一) 酆都冥界の成立 一三
- (二) 濟顛説話の成立 一八
- (三) 「明悟禪師趕五戒」論 三一

第五章 道教説話の研究 三三

(一) 神仙説話について 三三

(二) 呂洞賓伝説について 三三

(三) 「道情」について 三六

あとがき 三二

英文要旨 卷末一

索引 卷末二

中国近世
における
短篇白話小説の研究

序 章 短篇白話小説の成立

△はじめに▽

魯迅は『中国小説史略』の「第十二篇・宋之話本」の冒頭を、次のように書いた。

宋一代の文人による志怪小説は、平板で文彩に乏しくなった。伝奇小説も、往事に託して近聞を避けることが多くなり、古代を模倣しながら、かえってこれにおよばず、独創がなくなってしまうたといつてよい。だが市井においては、これと別の文芸があらたに発生していた。それは、民間の日常語で記録され、さまざまなエピソードを叙述したもので、「平話」と呼ばれた。つまり、こんにちの「白話小説」がこれである。

宋代の民間に発生した「白話小説」は、「白話」すなわち当時の民間における日常語を基調とする文章によって記録されたという文章上の特質とあいまって、六朝時代の志怪小説、および唐代の伝奇小説にくらべるならば、民衆の生活・心情をはるかにリアルに活写していたといつてよい。これは、おりから勃興しつつあった中国近世における都市生活者たちの趣向に迎えられ、元・明の間においてしだいに成熟して、やがて明代における白話小説の隆盛を現出する。明代は、『三国演義』・『水滸伝』・『西遊記』・『金瓶梅』などの、いわゆる四大奇書をはじめとするおびただしい白話小説を産んで、中国小説史上のもっともゆたかなみのりをもたらした。

四大奇書のかけにかくれて長く忘却されてきたのだけれども、この明代はまた、白話小説の短篇の分野でも、ゆ

たかなみのりをもたらしした時期であった。こんにち知られている、『三言』が、それである。魯迅の『中国小説史略』は、その『第二十一篇：明之擬宋市人小説及後來選本』において、この短篇の白話小説についてふれている。いま、その冒頭の部分を引いてみよう。

宋の説話の、のちに影響したものは、「講史」である。その著作のしばしば出たことは、第十四・十五篇に述べたとおりだ。明の説話人も、おおむねは歴史に取材したことを講じて名声を博していたのであって、ときには「説経」や「譚経」もあつたが、「小説」を講ずる者はとりわけまれであつた。だが明末になると、宋代の市人小説の流れが復興し、あるものは旧聞をとどめ、あるものは新作を出すというふうで、しきりに広く世間に行なわれるようになった。ただし、ふるい名称はほろんでしまつて、もう市人小説といわなくなったのだ。

これらの書物のうちでもっとも盛行したものとしては、はじめに『全像古今小説』四十巻がある。……『中国小説史略』は一九二四年に刊行された。すこしおくれて、塩谷温が「明の小説『三言』について」（一九二六年）を、ひきつづき長沢規矩也が「三言二拍について」（一九二八年）を、それぞれ雑誌『斯文』に発表した。明代の短篇白話小説は、こうしておよそ三〇〇年におよぶ忘却の淵よりひろいあげられて、ふたたび世人の注目をあびることになる。それからまた、およそ半世紀を閲しているのだが、この分野での研究もまた昔日の面影を一新しているといつてよい。

ところで、『三言』とは明末の人・馮夢龍（一五七四—一六四五）によって編集された『古今小説』（のち改めて『醒世通言』、『警世通言』、『醒世恆言』）のことで、それぞれ四〇篇の短篇白話小説をおさめる、短篇白話小説の選集である。馮夢龍の仕事は、ひきつづき類書の刊行をうながし、なかでも凌濛初（一五八〇—一六四四）の編集した『拍案驚奇』の初刻と二刻（やはりそれぞれ四〇篇の作品をおさめる）が、もっともよく知られている。あわせて、これを三

言二拍(三言兩奇ともいう)と称している。三言二拍の中から、さらに四〇篇が選ばれて『今古奇観』が編まれると、もっぱらこれが流行して、三言二拍の方は忘れられてしまった。これが、再び世に知られるのは今世紀にはいつてからであり、しかもわが国人の手によるものであったということは、不思議なえにしといふべきであろう。

『三言』は、わが読書界にゆかり深く、とりわけわが国の研究者によって熱心な検討を加えられてきたことを、ここで付言しておく。

寛保三年(一七四三)から宝暦八年(一七五八)にかけて岡白駒・沢重淵たちによって『小説精言』『小説奇言』『小説粹言』(計十四篇の作品を収める)の刊行がなされたが、いずれも中国の『三言』と『二拍』の翻訳訓解である。このあと西田維則『通俗赤繩奇縁』(宝暦二年・一七六一)、石川雅望『通俗醒世恆言』(寛政元年・一七八九)、江東月池睡雲菴主『通俗繡像新裁綺史』(寛政二年・一七九九)などのように中国近世の短篇白話小説の翻訳があいついで刊行されている。これと併行して、すぐれた翻案が登場して、それがわが江戸期の文学に異彩を放つていることも無視できない。上田秋成の『雨月物語』中の小説は、そうしたものの代表である。

今世紀の二〇年代を迎えて、久しく中国本土での失亡を伝えられていた『三言』『二拍』の原書が、わが国の塩谷温・長沢規矩也たちによって発掘されたのを契機に、日中兩國の研究者による原本の発掘と紹介があいつぎ、あわせてさまざまな研究も試みられながら今日に至っている。第二次大戦前の中国において、鄭振鐸の校訂による『三言』の原書の翻刻(活字本)が行なわれ、人民中国成立後には人民文学出版社・作家出版社から同様の翻刻が世に送られて、それぞれ読書界を裨益した。わが国でも佐藤春夫たちによって『今古奇観』(支那文学大観所収、大正一五年・一九二六)の翻訳が試みられてから、青木正児校注による『通俗古今奇観』(昭和七年・一九三二)の復刻があり、ついで村松暎訳『杭綺州譚』、入矢義高訳『雨窓欒枕集』、『洛陽三怪記』、吉川幸次郎訳『西山一窟記』、魚返善雄訳『中国千一夜』などのすぐれた現代語訳が刊行されている。昭和三三年(一九五八)には、千田九一たちに

より『今古奇観』（平凡社・中国古典文学全集所収）の全訳が公刊された。そのころ辛島驍が『三言』『二拍』などの全訳（東洋文化協会）を企画したが、惜しくも途中で刊行を停止した。

こうした情況の中で、短篇白話小説の研究もいよいよ盛んとなってきている。

諸先学の驥尾に付して、しばらくの間、私もまた、研究の対象を、もっぱら『三言』にすえながら、若干の調査と考察を試みてきた。本書は、その結果として、私の知り得た大体を成しているものである。本論に入るに先立ち、短篇白話小説成立の事情について略記しておくことにしたのは、本論への理解をより容易なものにしたいと願ったからにはかならない。以下の文章は、日中両国の諸先学の研究成果に多くを負っているものである。ここでは、叙述の煩瑣にわたることを避けるために、その旨をいちいち注記せず、主な参考文献をあげるに止めたが、文章の全体に対する責任は、もとより私自身に属しているものであること、いうまでもない。

△都市文化の成長▽

中国小説史における明代（一三六八～一六四三）は、いうまでもなく、白話小説の、空前のみのりを結んだ時期として知られている。しばらく、そのようなみのりのもたらされた背景について考察する。

中国社会は、明初における繁栄を経て、やがて大きな社会危機にみまわれる。貨幣経済の広範な流通に加えての高級官僚・大地主による土地の兼併、たびかさなる苛酷な重税によって、農村社会は極度に貧窮化されていき、その結果として表面に出てきた流民の増大というところに、この時代の危機が象徴されている。だが一六世紀中葉以降になると、中国社会は再び相対的な落ちつきをとり戻し、繁栄へと向かいはじめ、とりわけ商工業および都市経済の著しい発展がみられる。

蘇州・松江・常州・徽州・寧国・揚州・広徳などに集中した紡織業は、ほとんど空前ともいうべき盛況をとげた。この地方の紡織業の発展がもたらした諸都市の発達の中で、とりわけ蘇州の発達はめざましく、もはやそれは単なる商業都市と呼ばれるよりも軽工業都市的性格をより強くもつようになったといわれており、〈機戸〉といわれる資本の占有者と〈出力〉といわれる雇用労働者との関係には、のちの資本主義的生産様式の萌芽が認められるとも論じられる。そのほか、鉄冶・採煤業あるいは瓷器製造業などの手工業にみられる発展の姿には、いずれも明初を凌ぐものがある。なかでも特記されるのは印刷業のめざましい発展である。一五世紀の中葉に、江南の無錫・蘇州などに銅版印書が盛行するのだが、やがて嘉靖年間（一五二一—一五六六）になると、江南の丹徒県に鉛活字印書の発明がおこり、たちまち南京を中心とする大衆的な印刷文化の一大流行が現出するようになる。小説・戯曲類の印刷が盛行したのは、まさにこれとふかく関連する。いっぽう閩（福建）および荆楚（湖北・湖南一帯の地）地方での製紙業の発展にもめざましいものがあった。当時の印刷文化の盛行に、いっそう拍車をかけることとなった。

商工業の拡大にともなう都市の発展において当然注目されるのは、たえまなく膨脹を続けた都市の人口である。農村経済の破壊がもたらした流民の多くは、農村におけるさまざまな封建的諸関係を脱して都市に流入したと考えられ、彼等の多くが、都市における生産および消費労働の労働者あるいは零細商人という中下層市民を形成していった。いっぽうでは、高級官僚の退官者・大地主などの富豪も、競って都市に移住し、その消費文化を享受した。王室の絶対権力が基本的には動揺しつつあった事情との関連において、明末の都市における都市民の多くは、崩れゆく権力の抑圧から自由になろうとする、独自の都市文化を形成しようとしていた。

宋代における商業経済の拡大が、北宋の開封や南宋の杭州のような大都市の発展をうながし、その都市における一般大衆の要求として、この時代の新しい娯楽すなわち芝居・講談などの庶民文化の発展がうながされたと考えられている。そうした事情は、元代を経て明の時代に至るまで、同様に進行していった。元代における庶民文化の花

形ともいふべき芝居の流行についてはすでに周知のことであり、その台本は今日伝えられて元曲と称せられる。元曲の伝統は、明代にも受けつがれて明曲と呼ばれる長篇のレーゼ・ドラマを生んでいく。いっぽう、宋以来の伝統である「説書」とそのたね本となっていた「話本」の流行は、明代を迎えていっそう盛んとなった。いずれも都市のさかり場での華やかな民衆の娯楽生活の産物にほかならない。都市のさかり場での「説書先生」の話術は、この時代の都市民の趣向を反映して洗練されていくのだが、当時の印刷文化の発展と読書人口の増大の中で、それは「語って聞かせるもの」から「読んで楽しませるもの」へと変貌をとげてゆき、やがてすぐれた小説として定着をみせていく。読み切りの短篇から、雄篇大作に至る多くの傑作が、このころいっせいに出版されたのである。小説は、このようにしてこの時代の文芸界における代表的なジャンルとしての成長をとげる。

しかしながら、小説の、このような成長の背後には、しばしば支配者によるきびしい禁令のあったことを忘れてはならない。元代から明代にかけてのさまざまな資料は、当時の青年たちが生業を棄てて都市に出向き、うたやばなし、あるいはしばいに夢中になるものが多かったことを述べ、それに対する禁令の出されたこと、あるいは「説書家」たちが処刑されたことを記している。都市の中下層市民を構成する民衆を中核とする当時の大衆の自己表現としての民衆文芸は、こうした弾圧に抗しながら着実に発展していった。この時代の小説がもっているすぐれた性格としてのリアリズムは、こうした、民衆の対権力の姿勢と無関係に付与されたものでなかったにちがいない。

もちろん、新しい都市文化をさまざまに支えたところの、当時の知識階層の活躍も、ここでみのがすことはできない。ひきつづき、彼等の姿について瞥見しておこう。彼等もまた、新しい時代に生きる新しい知識人としての自己表現の場を、この小説に求めたのであった。

△明代の知識人▽

宋代は、旧来の門閥貴族による支配の機構にかわり、天子の独裁をたてまえとする新たな官僚制度による支配の方法が確立した時代であったという点において、中国政治史上とりわけ重要な時期であった。宋代の官僚は、科挙の試験にパスした知識階層によって占められていた。科挙の試験は、門閥貴族のようにその出身の資格が問われることなく、すべての者に対して平等に門戸開放されるのが原則であった。この試験で登用された人材には、進士の称号が与えられ、一般の庶民と隔絶したさまざまな特権が付与されて、やがて官僚として任官できる資格が与えられた。彼等は、士大夫・士人あるいは読書人と呼ばれて、当時の知識階層を代表する存在として公認されていたが、政治的には天子の専制を輔佐して民衆に臨む新しい支配階級を構成する重要なメンバーであった。かつて貴族制度のもとに貴族の文化がその時代の文化を代表したように、宋代の文化を代表したものは、新しい官僚制度のもとに栄えた士大夫官僚の文化であった。

しかしながら漢民族が異民族支配のもとに呻吟しなければならなかった元代は、とりわけ知識人たちにとってこの上ない受難のときであった。官僚となって支配階級の仲間入りする路が、容易でなくなつたからである。彼等に残された路は、従来は庶民の仕事とされていた役所の実務（雑役）にたずさわつて胥吏となる屈辱に服するか、でなければ、そうした屈辱をあくまで拒否して政界をのがれ、隠遁してはてるかであった。隠遁者の群からは、やがて芸術至上をこととする文人たちの誕生がみられ、そこに独自の文化が形成されていく。ともあれ元の時代は、やはり彼等にとつてとりわけ不幸な一〇〇年であったといわなくてはならない。

この元代の嵐を経た中国の知識人は、再び漢民族自立の明代を迎えて、しかしなお幸福でなかつた。彼等にもまた、科挙の試験を経て民衆と隔絶した特権を付与されるエリートとしての路は開かれていた。だが、そこには、も

はや宋代には一般的であつた士大夫官僚としての誇りを支えた何の実質もなくなつていたといわれる。明の太祖の知識人に対する対策は、決して彼等の良心の自由を保証しなかつたばかりか、却つてこれを専制的に抑圧した。天子の強力な中央集権的専制支配の確立をもくろんで企図された、新しい科挙制度の確立によつて、この時代の士大夫官僚の多くは、事實上、天子独裁のための有能で忠実な道具とされてしまい、やがてその弊害は目をおおうばかりとなつた。清初の著名な学者・顧炎武（一六三二—一六八二）は、こうした実態をきびしく批判して、これら生員を廃止してこそはじめて政治は改まり、世の中に有為の人材があらわれるのだと極言している。

明代の宮廷をとりまく知識人——士大夫官僚の白痴的な実態とは別に、やがてそうした情況に対する批判の立場を堅持する在野の知識人が出現する。そしてこの時代の文化は、実質的には、このような人びとによつて担われていく。

当時の中国における私立大学ともいふべき社会的地位を誇り得た私塾すなわち書院を根拠として形成された「陽明学派」の人びと、なかんずくその中のもつともラジカルな学風を受けついで王学左派の人びとが、まずそうした在野の知識人の一つの典型であつた。書院はひとり知識階層の出身者にかぎられず、広く一般民衆の中の学究をも含めた自由な討論を、その学問の基本的な方法論としていた。王心齋（一四八三—一五四〇）および李卓吾（一五二七—一六〇二）などといった人びとの思想と行動は、旧來の權威に寄りかかつていた士大夫に強い衝激を与えた。人間に内在する本源的なものを「童心」と名づけた李卓吾は、その童心ゆえに、人間はすべて尊嚴であり平等であると主張し、旧來絶対視されてきた儒教の權威をその根底から否定した。ある意味において、近代と直結する思惟をも含むこのような思想はたちまち権力者の憎悪を招き、彼は投獄されて獄死する。だが、彼の放つた痛烈な批判ののろしは、あらゆる抑圧をはねのけながら、清初に至るまで知識人の胸中に生きつづけた。李卓吾は、それまで知識人の読むべきでないとされてきた小説、とりわけ『水滸伝』の価値を高く評価したことも特記されなければな

らない。

書院出身者とはちがった意味において、やはり当代を批判しながら自由な文化の創造に貢献した知識人として注目されるのが、市隱と呼ばれる人々であった。蘇州・松江などの南方の大都市には、その経済的繁栄を基礎としての北方の中央文化に対する批判的な精神が、明初から横溢していた。市隱は、こうした状況を背景とした一種の自由人の群であり、沈周（二四二七—一五〇九）、祝允明（二四六一—一五二七）、唐寅（二四七〇—一五三三）、文徵明（一四七〇—一五五九）、徐禎卿（二四七九—一五二一）などという人びとが、その代表であったといわれている。旧来の権威に拘束されることのなかった彼等の姿勢は、そのまま当時の士大夫官僚に対する批判となっていた。そして、時に奇矯にも走る彼等の行為は、却ってその故に民衆の趣向に受け入れられた。ある富豪の小間使いに恋慕した唐寅が、その小間使いと結婚したい一念で、姓名を変えてその家に家庭教師として住みこみ、ついに目的を達したというエピソードは、そのまま小説に仕組まれてもてはやされた。儒教倫理を旨とする旧来の士大夫官僚のイメージと、これは全く相容れない。この時代を代表する在野の知識人の一つの典型であったといえよう。

大都市の繁栄を背景にして世俗を超越し、高踏の世界を闊歩して民衆の喝采を博したのが市隱だったのに対して、さらに違った形で現実と対決していた知識人について考えなければならない。彼等は、ともすれば歴史の表面から見失われがちなほどに地味であった。当時の知識人全体の中では、もっとも民衆と身近なところで生きていたということもできる。元代における戯曲作家の流れを汲む知識人たちが、その一つの例である。たとえば、『水滸伝』の作者——より厳密にいうなら、今日の『水滸伝』の成立にあずかって最も力のあった人——として知られている羅貫中。彼は元末明初に活躍した人であるが、元曲の作者としても知られている。その伝記はあまり明らかでないが、彼は胥吏の出身者であろうと考えられている。胥吏とは、役所の実務に従事するもので、官僚機構のもとでは最下層の吏員であった。そのような地位にいた彼が、『水滸伝』で示した文才のレベルの高さを思うと

き、彼の意識が、もはや従来の士大夫官僚のそれと無縁であったことに気づかないわけにいかない。現実には汗を流して生きる民衆のエネルギの中こそ、彼自身の存在する意味を追求しつづけたことを、『水滸伝』は示している。ついで注目されるのは、科挙にパスして官僚となる夢を追いながら、その路を閉ざされて一生を不遇に過ごさなければならなかった知識人の、やがて小説の世界に活路を見出していった人びとである。たとえば『西遊記』の作者、吳承恩（一五〇〇？—一五八二？）。かりにも落第書生のなれの果てといひすてることを許さない独自のすぐれた文体が、この人の魅力である。彼もまた、さまざまの形をとって旧来の権威に対するあくなき批評を試みている。『許仙鉄樹記』『呂仙飛劍記』『薩仙咒策記』など、道教に取材した小説を残している鄧志謨（万暦年間の人）も、吳承恩とよく似た境遇の人であった。『三言』の編者・馮夢龍（一五七四—一六四五）も、やはり同じ類型の中で考えられてよい人であった。

以上、この時代における在野の知識人についてみてきたのであるが、ここでいちように指摘できる彼等に共通した性格は、基本的には旧来の権威ないし伝統文化を否定し、その拘束をはねのけて闊達に生きたということである。具体的にいえば生員出身の士大夫官僚の支配に対する反発であり、客観的には、当時の王朝に対する抵抗という意味をもっていた。いうまでもなくそれは、一面において、彼等が当時の被支配階級としての民衆の意識に著しく接近していたことを物語っている。そして、この時代の文化が民衆の体質・趣向を極度に反映させようとした文化であったことを示している。小説こそ、そうした民衆文化の尤なるものであった。

〈明代の小説観〉

正統文化の継承者をもって任ずる中国の知識人は、古くから小説に対する軽視の念をかくすことがなかった。そ